2019 年のザルツブルク音楽祭＆ロッシーニ音楽祭

水谷 彰良

日本ロッシーニ協会メールマガジン『ガゼッタ』第 206 号とその続き（2019 年 8 月 28、30 日、9 月 1 日配信）掲載の「2019 年のザルツブルク音楽祭」「2019 年のロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル（1）（2）」を統合し、図版を追加して郵船トラベルのサイトに掲載します。（2019 年 9 月）

今夏のオペラ旅は、郵船トラベル「ペーザロ・ロッシーニ音楽祭＆ザルツブルク音楽祭 10 日間（8 月 14 日～8 月 22 日）」の同行講師のみとあって鑑賞したオペラと演奏会の数は例年に比して少ないものの、後述するようにザルツブルクで二つのオペラと 1 回のコンサート、ペーザロで四つのオペラと二つのコンサートと、合計九つの公演を観ることができました。以下、そのレポートです。

8 月 14 日に羽田を発ち、フランクフルトを経由して同日中にザルツブルクに到着しました。現地の最高気温は 20～22 度、最低気温は 10～12 度と涼しく、異常猛暑の日本との気温差に驚きました。ザルツブルクでの鑑賞は 15 日と 16 日の 2 日間。勝手知ったるザルツとあって、観光無しで臨みました。

◎ヴェルディ《レクイエム》（祝祭大劇場。8 月 15 日）

今年の会場前の賑わい

最初の鑑賞は 8 月 15 日午前 11 時開演、ムーティ指揮ヴィーン・フィルハーモニー管弦楽団のヴェルディ《レクイエム（Messa da requiem）》です。出演は次のとおり。

指揮：リッカルド・ムーティ（Riccardo Muti）
管弦楽：ヴィーン・フィルハーモニー管弦楽団（Wiener Philharmoniker）
合唱：ヴィーン国立歌劇場合唱団（Konzertvereinigung Wiener Staatsopernchor）
ソプラノ：クラッシミラ・ストヤノヴァ（Krassimira Stoyanova）
メッゾソプラノ：アニタ・ラチヴェリシュヴィリ（Anita Rachvelishvili）
テノール：フランチェスコ・メーリ（Francesco Meli）
バス：イルダール・アブドラザコフ（Ildar Abdrazakov）

単なる演奏会ではなく、1989 年 7 月 16 日に亡くなったヘルベルト・フォン・カラヤンの没後 30 年を記念した特別公演とあって会場は満席、左右の隅に補助席を設けて立錐の余地もありません。78 歳の指揮者ムーティも特別な思いがあったことでしょう。なぜなら彼はカラヤンの招きで 1971 年に初めてザルツブルク音楽祭に登場したからです。筆者の席は下手側の 3 列目、ムーティの表情と指揮ぶりを見るのにうってつけでした。

ソリストは現在考えうるベストの布陣。ソプラノのクラッシミラ・ストヤノヴァは 1962 年生まれのブルガリア人。アイーダを MET やスカラ座、《ドン・カルロ》エリザベッタをスカラ座、英国ロイヤル・オペラハウス、ヴィーン国立歌劇場などで演じています。ちょっとキツイ表情で声の響きが弱く感じられましたが、これは筆者の席が近いのが原因で、遠くに飛ばす良い発声の裏返しでしょう。

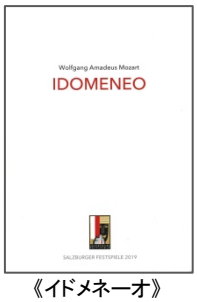
突出していたのがメッゾソプラノのアニタ・ラチヴェリシュヴィリ。1984 年グルジア［ジョージア］のトビリシ生まれでまだ若いのですが、豊麗な声、セクシーな低声と力強い高音で他を圧倒しました。ムーティは彼女を「現代最高のヴェルディ・メッゾソプラノ」と断言しているそうですが、まさにそのとおり。

ご存知フランチェスコ・メーリは、現在世界で最もヴェルディ《レクイエム》に求められるイタリア人テノールです。マッチョな声と卓抜なフレージング、ピアニッシモの巧さも抜群です。バスのイルダール・アブドラザコフも格調高い歌唱を繰り広げました。それ以上に感銘を与えたのが、ヴィーン・フィルハーモニー管弦楽団とヴィーン国立歌劇場合唱団の熱演です。ムーティが随所に指示する独自のテンポとアゴーギクに良く応え、何度も現れる「怒りの日」の音楽も怒髪天を衝く激しさでした。

◎モーツァルト《イドメネーオ》（フェルゼンライトシューレ。8 月 15 日）

この日の午後はモーツァルト《イドメネーオ》とゲルギエフ指揮《シモン・ボッカネグラ》の二択でしたが、筆者は 15 時開演の《イドメネーオ》を選びました。主な出演者は次のとおり。

演出：ピーター・セラーズ（Peter Sellars）
指揮：テオドール・クルレンツィス（Teodor Currentzis）
管弦楽：フライブルク・バロックオーケストラ（Freiburger Barockorchester）
合唱：ムジカエテルナ合唱団（musicAeterna-Chor）
イドメネーオ：ラッセル・トーマス（Russell Thomas）
イダマンテ：パウラ・マリヒー（Paula Murrihy）
イリア：イン・ファン（Ying Fang）
エレットラ：ニコル・シュヴァリエ（Nicole Chevalier）
アルバーチェ：レヴィ・セクガパーネ（Levy Sekgapane）ほか



《イドメネーオ》
プログラム

この公演は何にも増してテオドール・クルレンツィスの躍動感あふれる――というより踊り跳ねる――指揮から導かれる鮮烈で斬新な音楽に驚愕しました。フライブルク・バロックオーケストラの奏者もノリノリで、テンポが速く緩急自在で意表を突き、フォルテピアノも雄弁に関与します。

歌手はイドメネーオ役のアメリカ人テノール、ラッセル・トーマスの声に思いのほかインパクトが乏しく、着ている軍服にも違和感あり。イダマンテ役のアイルランド人パウラ・マリヒーは魅力的なメッゾソプラノですが、より印象的なのがイリア役の中国人ソプラノ、イン・ファンでした。清涼な声と見事なバロック発声に感心していたら、休憩中に話したオペラ評論家 I さんから、「ああ見えて結構歳がいっているのよ。以前は蝶々夫人も歌っていたの」と言われました。けれども筆者の眼にはとても若く映り、素晴らしい発声の古楽歌手に思えました。

《イドメネーオ》のカーテンコール（筆者撮影）

それ以上に存在感をみせたのが、エレットラ役のアメリカ人ソプラノ、ニコル・シュヴァリエ。卓抜な演技と表現豊かな歌唱で際立ちました。アルバーチェ役の南アフリカ人レヴィ・セクガパーネは、いま売り出しのベルカント・テノールです。歌手の国籍がさまざまなのは、後述するセラーズの演出コンセプトと関係するようです。

休憩後の冒頭、オケピットと客席の間にムジカエテルナ合唱団が横一列に並び、真剣な表情で客席後方の上部を凝視し続けます。なんじゃこれは、と思っていたら、モーツァルト《エジプト王タモス》の楽曲がドイツ語で荘厳に歌われました。もちろんこれはクルレンツィスと演出家セラーズによる挿入です。

鬼才ピーター・セラーズの演出は現代の環境問題をテーマとする政治的な読み替えで、難破したイドメネーオの船から移民が入国管理局に来た設定なんて予備知識無く見る者には分かりません。フェルゼンライトシューレの広い舞台に置かれたプラスティックの巨大な容器が海から流れ着いた環境破壊の原因物質というのも同様です。

最終場のバレエシーンにサモア出身の舞踏家レミ・ポニファシオの振付で、ハワイ出身の女性ダンサーと、キリバス人の男性ダンサーが登場しました（註：この部分は 8 月 28 日配信の訂正文に沿って記述を変更）。後者は前掛けをパン、パン、と大きな音で叩きながらすり足で舞台を移動するオジサンで、海面上昇で消滅する島民を代表しましたが、筆者には坂上二郎そっくりのオジサンが「飛びます、飛びます」と歩き回るように見えて笑えました。演出はともあれ、クルレンツィス指揮《イドメネーオ》最高でした！

◎ヘンデル《アルチーナ》（モーツァルト劇場。8 月 16 日）

翌 8 月 16 日は、午前 11 時から祝祭大劇場でバレンボイム指揮ウェスト=イースタン・デヴァン管弦楽団による演奏会――曲目はアンネ＝ゾフィー・ムター独奏のシベリウス《ヴァイオリン協奏曲》&ベートーヴェン交響曲第 7 番――がありましたが、筆者はパス。ゆっくり休んで 18 時 30 分開演のヘンデル《アルチーナ》に備えました。主な出演者は次のとおり。

演出：ダミアーノ・ミキエレット（Damiano Michieletto）
指揮：ジャンルーカ・カプアーノ（Gianluca Capuano）
管弦楽：レ・ミュジシャン・デュ・プランス（Les Musiciens du Prince）
アルチーナ：チェチーリア・バルトリ（Cecilia Bartoli）
ルッジェーロ：フィリップ・ジャルスキー（Philippe Jaroussky）
モルガーナ：サンドリーヌ・ピオー（Sandrine Piau）
ブラダマンテ：クリスティーナ・ハマーストレーム（Kristina Hammarström）
メリッソ：アラステア・マイルズ（Alastair Miles）ほか

《アルチーナ》のプログラム

ヘンデル《アルチーナ》は魔法オペラの一種で、名作ゆえ上演の機会も多く、筆者は 2010 年 11 月ヴィーン国立歌劇場のエイドリアン・ノーブル演出、マルク・ミンコフスキ指揮レ・ミュジシャン・デュ・ルーブルの公演を観ています、これはアルチーナがアニヤ・ハルテロス、ルッジェーロがヴェッセリーナ・カサロヴァ、モルガーナがヴェロニカ・カンジェミ、ブラダマンテがクリスティーナ・ハマーストレームという配役で、DVD も発売されています（Arthaus 海外盤）。そして 2015 年エクサンプロヴァンス大劇場の上演映像（Erato 海外盤）がベストと思っていました。パトリシア・プティボンのアルチーナ, フィリップ・ジャルスキーのルッジェーロほかの歌手が大変素晴らしく、エロス過剰のケイティ・ミッチェル演出、覇気に富むアンドレーア・マルコン指揮フライブルク・バロックオーケストラと三拍子そろった名演だからです。それゆえ今回これを凌駕できるかとの関心もありましたが、結果的に異なるタイプの公演を楽しむことができました。

このプロダクションは今年の聖霊降臨祭音楽祭上演の再演で、演出家ダミアーノ・ミキエレットは舞台の左隅に大きな鏡を配し、アルチーナはその中から登場します。チェチーリア・バルトリ演じるアルチーナは魔法によって美しい姿をしていても、鏡の中には老婆となった現在の姿が映っているという設定です。そして回転する舞台に透けて見える壁を設け、バルトリと助演による現在の分身が向き合い、ときにシンクロして演技します。こうした着想は過去に例があり、ミキエレットも 2016 年 ROF《湖の女》に劇の主人公が老いた姿の分身を登場させました。今回彼が過剰なエロスを避けていることは、アルチーナ登場のアリアが単独で歌われたことでも判ります。色っぽい演出を期待した筆者は拍子抜けしながらも、歌手たちの演技と歌唱に集中することができました。

バルトリはいつもながらの豊かな表情と演技、卓抜なアジリタでアルチーナを演じました。3 曲の短調のアリア――「ああ、私の心よ」「蒼ざめた霊たち」「私には涙しか残されていない」――はどれも胸を打つ名唱で、メッゾソプラノの声種により表現に深みが増した気がします。ルッジェーロ役のカウンターテナー、フィリップ・ジャルスキーは 2015 年の上演映像と遜色なく、バルトリとの共演で歌の表現と技巧がアップした感があります。とりわけアリア「緑の野、心地よい森」が、流麗なフレージングと丁寧な歌唱により感銘を誘いました。他の歌手、モルガーナ役のサンドリーヌ・ピオー、ブラダマンテ役のクリスティーナ・ハマーストレーム、メリッソ役のアラステア・マイルズも見事な歌唱と演技で気を吐きました。

《アルチーナ》のカーテンコール（筆者撮影）

ジャンルーカ・カプアーノ指揮の古楽器アンサンブル、レ・ミュジシャン・デュ・プランスの鮮烈でダイナミックな演奏も特筆に値します。昨年までのジャン=クリストフ・スピノジ指揮アンサンブル・マテウスは音響的に物足りなかったのですが、今年はその点でも不満がありません…PA のおかげもあるでしょうが…。

前記のように演出面でパッとしない部分もありましたが、プロジェクションマッピングも用いで徐々に見どころが増え、最後に大きなガラスの鏡をジャルスキーが叩き壊してアッと驚かせ、その破片が天井から舞台に降りて来るエンディングにも大いに感動しました。ちなみに、子供のオベルト役を歌った東洋系のシェーン・パークの歌唱にも感心しました。こういう少年歌手を去勢したら素晴らしいカストラートになるだろうなあ…と書けば不謹慎と言われるでしょうが、芸術に犠牲は付き物と思いますし、私自身もかなり犠牲を払ってきたつもり。ヴィーン少年合唱団の逸材から新たなファリネッリが誕生したら、間違いなく歌唱の歴史は変わるでしょう…現在なら簡単なパイプカットで済みます。とはいえ未成年への手術は禁じられ、不可能ですが…。

◎《デメートリオとポリービオ》（ロッシーニ劇場。8 月 18 日）

8 月 17 日はツアー専用の大型バスでザルツブルクを発ち、ブレンナー峠を超えて北イタリアのヴィチェンツァま

で移動し、近郊の美しいヴィッラに宿泊しました。翌 18 日は朝からヴィチェンツァに現存する世界最古の木造劇場「テアトロ・オリンピコ」を訪れ、夕刻ペーザロ入りしました。そして午後 8 時からロッシーニ劇場にて《デメートリオとポリービオ》の観劇です。演奏と配役は次のとおり。

演出：ダヴィデ・リヴェルモレ（Davide Livermore）
指揮：パオロ・アッリヴァベーニ（Paolo Arrivabeni）
管弦楽：フィラルモーニカ・ジョアキーノ・ロッシーニ（Filarmonica Gioachino Rossini）
合唱：フォルトゥーナ劇場 M.アゴスティーニ合唱団（Coro del Teatro della Fortuna M. Agostini）
リジンガ：ジェシカ・プラット（Jessica Pratt）
デメートリオ：フアン・フランシスコ・ガテル（Juan Francisco Gatell）
シヴェーノ：チェチーリア・モリナーリ（Cecilia Molinari）
ポリービオ：リッカルド・ファッシ（Riccardo Fassi）

これはロッシーニが正式なオペラ作曲家デビューに先立って作曲した楽曲を用い、巡業一座を率いるテノール歌手・作曲家ドメーニコ・モンベッリが完成した作品です。ロッシーニは複数の曲を 1810 年 7 月頃に作曲、1812 年 5 月 18 日にモンベッリ一座がローマのヴァッレ劇場でロッシーニの歌劇として初演しました。今回の上演は 2010 年の ROF 上演の再演に当たり、日本語字幕付きのソフト（Arthaus Musik）もあるので舞台に関する感想を省略しますが、オペラ・セーリアの時代劇としていささか弱いこの作品を、劇場に棲む歌手の幽霊たちが夜な夜な繰り広げる劇に置き換えて楽しませ、アイディアにも富んでいます。

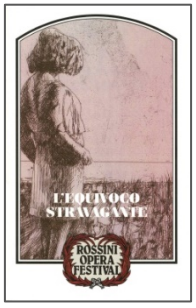
演奏は指揮者パオロ・アッリヴァベーニが快適なテンポで牽引しますが、管弦楽のフィラルモーニカ・ジョアキーノ・ロッシーニがいつものように上手ではありません。とりわけホルン奏者とフルート奏者が凡庸で、弦の合奏も粗く、オイオイ！と思う瞬間が幾つもありました。歌手はリジンガ役のソプラノ、ジェシカ・プラットが強い声で、高音を叫びがちなのが気になります。その傾向は以前からありましたが、音楽にモーツァルト時代のテイストが備わるこの作品にはミスマッチ（観客はアクートを喜んでいましたが…）。その意味ではシヴェーノ役チェチーリア・モリナーリの方が真正のベルカント歌手で、若くても気品があり、広い音域に滑らかな歌唱を繰り広げました。デメートリオ役のフアン・フランシスコ・ガテルは 1978 年アルゼンチン生まれのテノールで、ドラマティックな表現にも秀でています。2010 年のシー・イージェと同じメイクと扮装とあって素のイケメンぶりが見えないのが残念！　ポリービオ役のバス、リッカルド・ファッシも好演しましたが、舞台は前回の上演や DVD の既視感が強く、旅の疲れも相まって観劇に集中できませんでした。

《デメートリオとポリービオ》のカーテンコール（筆者撮影）

◎《ひどい誤解》（ヴィトリフリーゴ・アレーナ。8 月 19 日）

翌 8 月 19 日は朝から大忙し。ツアーのペーザロ観光に現地ガイドの通訳を兼ねて同行、6 月に開館したロッシーニ国立博物館の訪問、ロッシーニの家で今年から始まった地下ワイン庫の試飲会、ペーザロ随一のレストラン「ロ・スクディエロ」での昼食会があり、午後 4 時からロッシーニ劇場でコンサートも観たのです。

一連の催しについては本稿末尾に譲り、この日夜 8 時から観劇した《ひどい誤解》に移りましょう。演奏と主な配役は次のとおり。



演出：モーシュ・ライザー＆パトリス・コーリエ（Moshe Leiser & Patrice Caurier）
指揮：カルロ・リッツィ（Carlo Rizzi）
管弦楽：RAI 国立交響楽団（Orchestra Sinfonica Nazionale della Rai）
合唱：ヴァンティーディオ・バッソ劇場合唱団（Coro del Teatro Ventidio Basso）
エルネスティーナ：テレーザ・イエルヴォリーノ（Teresa Iervolino）
ガンベロット：パオロ・ボルドーニャ（Paolo Bordogna）
ブラリッキオ：ダヴィデ・ルチアーノ（Davide Luciano）
エルマンノ：パヴェル・コルガティン（Pavel Korgatin）

ロザリーア：クラウディア・ムスキオ（Claudia Muschio）
フロンティーノ：マヌエル・アマーティ（Manuel Amati）

これはデビュー作《結婚手形》に続くロッシーニの第 2 作。彼の最初のオペラ・ブッファでもあります。1811 年 10 月 26 日にボローニャのコルソ劇場で行われた初演は成功しましたが、ガエターノ・ガズバッリの台本に含まれる性的な隠喩やきわどい言葉、カストラートにするため去勢された息子が軍隊を脱走して女として匿われている設定が警察当局に批判され、最初の三回でお蔵入りになったことでも知られます。

コンビの演出家モーシュ・ライザー&パトリス・コーリエはチューリヒ歌劇場やザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭でバルトリのプロダクションを手掛け、筆者は現地で観劇した《ジューリオ・チェーザレ》《ノルマ》《オテッロ》を高く評価しています。でも今回はヴィトリフリーゴ［旧アドリアティック］・アレーナの広い舞台。ロッシーニ最初のオペラ・ブッファにどんなアイディアをひねり出すのでしょうか？……蓋を開けると意外にもすっきりとした舞台でした。全体を一種類の壁紙を貼った巨大な室内に見立て、左手に傾いだ金色の額縁があって 4 頭の牛のいる牧場が描かれています（単なる絵ではないことは、劇の最後に明らかになります）。舞台の周囲も傾いた巨大な金色の額縁となっていますので、額縁の中で演じられる喜劇という印象とともに、不均衡の遠近法が空間に広がりをもたらします。

《ひどい誤解》の舞台　©Studio Amati Bacciardi

登場人物は合唱団員も含めて全員「付け鼻」をし、ブラリッキオはシラノ・ド・ベルジュラックを彷彿とさせます。意図は明確でなく、歌手はさぞ歌いにくいだろうなあ、と思いました。冒頭に召使同士のセックスを見せるなど作品の性的側面を強調した演出ですが、視覚的には美しく、洗練されていました。

この上演は後述する《セミラーミデ》同様、演奏水準が極めて高いものでした。まず驚いたのは、指揮者カルロ・リッツィが変化に富む音楽を完全暗譜で指揮したこと…総譜どころか譜面台すら無い！　このオペラは歌詞や台詞が非常に多く、凝った言葉遣いも多いので、歌手が言葉を落とせば指揮者が即座に付ける必要があります（ROF はプロンプターを使いません）。リッツィは間違いなく音符と歌詞のすべてをそらんじていたのでしょう…彼の導く音楽は細部まで彫琢され、序曲からして絶品でした。

歌手も粒ぞろい。エルネスティーナ役のテレーザ・イエルヴォリーノは眼鏡をかけた文学少女にぴったりで、広い音域に豊かな歌唱を繰り広げました。ガンベロット役のパオロ・ボルドーニャはいつもながらひょうきんな表情と演技で楽しませ、ブラリッキオ役のダヴィデ・ルチアーノ――昨年 ROF の《セビーリャの理髪師》フィガロで脚光を浴びた逸材――も明るく華やかに劇を盛り上げます。エルマンノ役のロシア人テノール、パヴェル・コルガティンだけは歌にインパクトが乏しく、存在感も薄い気がしました。

今回再認識したのが、最初期の作品でロッシーニが完全に個性を確立していたこと。前日上演された《デメートリオとポリービオ》の音楽が旧弊なのに、1 年ちょっとしか違わない《ひどい誤解》には時代の先端をゆく自由奔放にして創意に富む音楽が聴き取れます。最初期の作品に関しては、前世代と同時代の影響を考慮して慎重に判断すべきですが、このように素晴らしい演奏で聴けば「若き天才」を確信するしかありません。

筆者の感想はここまでですが、二つ付け加えることがあります。その一つはイタリア語だけでなく英語の字幕も採用したこと。これは ROF 初の試みで、凝りに凝った喜劇台本を外国人に理解させる一助となりました。今後もその路線でいくのかどうかは分かりませんが…

もう一つはレチタティーヴォ・セッコの伴奏にチェンバロを用いたこと。これは 2008 年 ROF 上演の指揮者ウンベルト・ベネデッティ・ミケランジェリが採用したもので、2002 年に ROF 初演したリッツィはフォルテピアノを用いました。筆者はその後来日したゼッダ先生にこの問題を指摘し、「ロッシーニのセッコ伴奏にはチェンバロではなくフォルテピアノを使うべき」とかみついた経緯があります。ミケランジェリに倣ったリッツィは、この点でミソをつけてしまったと思います。

◎若者公演《ランスへの旅》（ロッシーニ劇場。8 月 20 日）

8 月 20 日は午前 11 時から若者公演《ランスへの旅》がありました。いつものサージ演出で、日本人はアカデミア・ロッシニアーナのメンバーに含まれません。昨年との違いは、重要なコリンナとメリベーア侯爵夫人をシングルキャストにしたこと。18 日の配役も含めて国籍と共に次に掲げます。

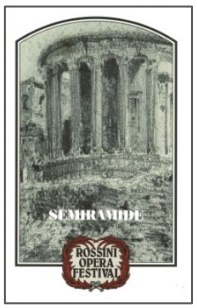
指揮：ニコラス・ネーゲレ（Nikolas Nägele）
管弦楽：G.ロッシーニ交響楽団（Orchestra Sinfonica G. Rossini）
コリンナ：Giuliana Gianfaldoni (イタリア)
メリベーア侯爵夫人：Chiara Tirotta (イタリア)
フォルヴィル伯爵夫人：Paola Leoci (イタリア、18 日), Olga Dyadiv (ウクライナ、20 日)
コルテーゼ夫人：Claudia Urru (イタリア、20 日), Maria Chabounia (ベラルーシ、20 日)
騎士ベルフィオーレ：Daniel Umbelino (ブラジル、18 日), João Terleira (ポルトガル、20 日)
リーベンスコフ伯爵：Diego Godoy (チリ、18 日), Matteo Roma (イタリア、20 日)
シドニー卿：Dean Murphy (アメリカ、18 日), Dmitry Cheblykov (ロシア、20 日)
ドン・プロフォンド：Diego Savini (イタリア)
トロンボノク男爵：Andrei Maksimov (ロシア)
ドン・アルヴァーロ：Jan Antem (スペイン、18 日), Dean Murphy (アメリカ、20 日)
ドン・プルデンツィオ：Jenisbek Piyazov (ウズベキスタン)
ドン・ルイジーノ：João Terleira (ポルトガル、18 日), Daniel Umbelino (ブラジル、20 日)
デリア：Olga Dyadiv (ウクライナ、18 日), Chiara Tirotta (イタリア、20 日)
マッダレーナ：Ulyana Biryukova (ロシア)
モデスティーナ：Francesca Longari (イタリア)
ゼフィリーノ／ジェルソミーノ：Matteo Roma (イタリア), Diego Godoy (チリ)
アントーニオ：Kyeongwook Jang (韓国)

即戦力の実力が重視され、シングルキャストのコリンナ役ジュリアーナ・ジャンファルドーニは来年の本公演に抜擢されても不思議でない逸材です。ドン・プロフォンド役のディエゴ・サヴィーニも歌手として完成されています。他にもメリベーア侯爵夫人のキアーラ・ピロッタ、顔と歌い方がフローレスそっくりなポルトガル人テノールのフアン・テレイラが将来有望です。その意味で今年は水準の高いメンバーが揃っていました。

◎《セミラーミデ》（ヴィトリフリーゴ・アレーナ。8 月 20 日）

この日は夜 7 時から大作《セミラーミデ》の観劇です。演奏と主な配役は次のとおり。

演出：グラハム・ヴィック（Graham Vick）
指揮：ミケーレ・マリオッティ（Michele Mariotti）
管弦楽：RAI 国立交響楽団（Orchestra Sinfonica Nazionale della Rai）
合唱：ヴァンティーディオ・バッソ劇場合唱団（Coro del Teatro Ventidio Basso）
セミラーミデ：サロメ・ジーチャ（Salome Jicia）
アルサーチェ：ヴァルドゥイ・アブラミヤン（Varduhi Abrahamyan）
アッスール：ナウエル・ディ・ピエロ（Nahuel di Pierro）
イドレーノ：アントニーノ・シラグーザ（Antonino Siragusa）
アゼーマ：マルティニアーナ・アントーニエ（Martiniana Antonie）
オーロエ：カルロ・チーニ（Carlo Cigni）ほか



このロッシーニ最後のオペラ・セーリアは、ROF では 1992 年にゼッダ指揮で初上演され、1994 年と 2003 年を経て今回 16 年ぶりの上演となります。演出家グラハム・ヴィックはこれまで ROF で《幸せな間違い》（1994 年。2015 年再演）、《モイーズとファラオン》（1997 年）、《エジプトのモゼ》（2011 年）、《ギヨーム・テル》（2013 年）を手掛け、その多くでスキャンダルを巻き起こしたから、《セミラーミデ》も普通のはずがありません。初日は喝采の後に長いブーが続いたと聞きましたので、俄然期待が高まります。

オケピットの右横の小ステージには、枕元にテディベアを置いたベッドがあり、子供時代のアルサーチェが寝ている設定です。舞台のありさまを詳しく説明できませんが、幾つかのシーンで巨大な眼と、目の部分をカットした老人の顔が映写されました。これはセミラーミデとアッスールによって殺されたニーノ王のようです。

人物は現代衣装が大半ですが、イドレーノはインドのカラフルな服、アゼーマはお姫様の美しいドレスを着てい

ます。オーロエは半裸で身体を白塗りした未開の宗教の祭司長らしく、同じ姿の 5 人の弟子を従えています。第 1 幕導入曲の合唱団とシラグーザは世界各国の国旗とおぼしきカラーのペインティングをし、日の丸みたいに塗った団員もいます。現代を基本にしながらも、未開人オーロエの一行を交えて劇が進行するので訳が分かりません。

セミラーミデが白い髪をした今どきのキャリアウーマンであるのに対し、息子のアルサーチェは女性でハイヒールを履いています。第 2 幕では胸の谷間を強調したアルサーチェとの二重唱がレズビアン風に歌われましたが、息子であることに変わりはありません。一方、イドレーノとアゼーマは最初から恋人同士に見えます。

子供の頃に遊んだテディベアが巨大化して現われたり、母が父を殺したときの記憶を描いた巨大な絵があるなど成人したアルサーチェの心の傷が示され、セミラーミデも自分が殺した夫の眼から逃れられない…そう解釈すれば、ヴィックはこの 2 人の心の闇をクローズアップしたのでしょう。とはいえ 1 回の鑑賞では判らない難解な演出を勝手に解釈してもピントが外れるだけ。秋には上演映像が RAI 5 で放送されますので、それを見て皆さん自分なりに判断してください。

《セミラーミデ》の舞台　©Studio Amati Bacciardi

演奏は文句なしに最高でした。でもこの日は 4 回目で最終日。複数回観た知人は 3 回目がすべてにおいてベストと断言していました。指揮のミケーレ・マリオッティはロッシーニの音楽のすべての意味を理解したように、序曲冒頭から瞬間瞬間を際立たせます。RAI 国立交響楽団も一分の隙もなく応え、ロッシーニの音楽が現代音楽さながらに緻密な音と音色の配合で成り立っていることが分かります。舞台裏のバンダ も明瞭でした。

歌手はセミラーミデ役サロメ・ジーチャとアルサーチェ役ヴァルドゥイ・アブラミヤンが豊かな表現と卓越した歌唱で傑出し、表情と演技も抜群です。イドレーノ役のアントニーノ・シラグーザも気迫に富み、力強い高音を放ちましたが、声の色がやや異質なため今後は ROF への出演が減るかもしれません。アッスール役のナウエル・ディ・ピエロは、1984 年生まれのアルゼンチン人のバス。2017 年ナンシーのロレーヌ歌劇場でアッスールを演じ、そのときのセミラーミデがジーチャ、アルサーチェがカウンターテナーのファジョーリでした。力強い発声でアジリタに独自の用法があり、今後 ROF の戦力になりそうです。オーロエ役のカルロ・チーニは 2017 年《コリントスの包囲》のイエロスです。

3 時間 50 分の長尺なのに、途中で眠くならなかったのは、目を離せない舞台と見事な演奏のおかげ。もちろんロッシーニの音楽あればこそ。筆者が ROF でメインのオペラを 1 回しか見なかったのは今回が初めてで、後悔しています…来年はこれまでどおり 3 回を目標にします。

◎「ROF40 周年ガラ・コンサート」（ヴィトリフリーゴ・アレーナ。8 月 21 日）

翌 8 月 21 日は観劇の最終日。夜にガラ・コンサートがあるだけなので午前中にロッシーニ国立博物館を再度訪れ、午後を古本屋回りに充てました。今回は全集版の新刊が二つあり、送料を含め 800 ユーロ超の出費です！

夜 8 時 30 分からのヴィトリフリーゴ・アレーナにおけるガラ・コンサートは、カルロ・リッツィ指揮 RAI 国立交響楽団、ヴァンティーディオ・バッソ劇場合唱団。歌手は最初の告知にあったアーウィン・シュロットが消え、プログラムに記載されたミルコ・パラッツィも出ません。開演前にセルゲイ・ロマノフスキーが出ないとアナウンスがあり、出鼻をくじかれました。実際の演奏曲（略記）と歌手は次のとおり。

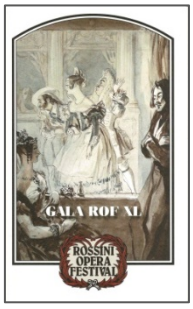
第一部

※《セビーリャの理髪師》より序曲、フィガロのカヴァティーナ（フランコ・ヴァッサッロ）、バルトロのアリア（パオロ・ボルドーニャ）、伯爵のアリア（ローレンス・ブラウンリー）

※《ランスへの旅》からメリベーアとリーベンスコフのシェーナと二重唱（アンナ・ゴルヤコヴァ／ルジル・ガティン［ロマノフスキーの代役］）

※《ラ・チェネレントラ》よりマニーフィコのアリア（ニコラ・アライモ）、ラミーロのアリア（フアン・ディエゴ・フローレス）

※《アルジェのイタリア女》より第 1 幕フィナーレ（ブラウンリー、ゴルヤコヴァ、ボルドーニャ、ペルトゥージほか）



第二部

※《エルミオーネ》よりグラン・シェーナ（アンジェラ・ミードほか助演）

※《ギヨーム・テル》より序曲、アルノールとテルの二重唱（フローレス／ペルトゥージ）、テルのエール（ヴァッサッロ）、アルノールのエール（フローレス）、第 4 幕フィナーレ（ミード、フローレス、ペルトゥージほか）

ROF40 周年なら過去の名歌手が勢揃い、と思ったらさにあらず。総裁で芸術監督も兼ねるパラシオには違う意図があったようです。なぜなら ROF に出たことのないメトロポリタン歌劇場のアンジェラ・ミード（Angela Meade）とフランコ・ヴァッサッロ（Franco Vassallo）を招聘したからです。ミードは 2018 年 MET のセミラーミデ、ヴァッサッロは 2005 年に《セビーリャの理髪師》フィガロで MET デビューし、08 年と 09 年にも演じています。

これに対し、フローレス、ボルドーニャ、アライモ、ペルトゥージは ROF の常連、ブラウンリーとゴルヤコヴァも過去 ROF で主演しています。MET 組は 40 周年と無縁だから、ROF にアメリカ人の観客を増やす方策か、と疑ってしまいます。これでチケット代が《セミラーミデ》と同じ？との声も聞かれましたが、日本はフローレス独りにもっと高いお金を支払うので文句は言えません…

結果は成功と言い難い部分が多々ありました。最初に登場したヴァッサッロがフィガロのカヴァティーナを歌うのに楽譜を持ってきたので唖然としました。第二部テルのエールでも観客を白けさせ、ロッシーニ歌手失格です。その影響からか、ボルドーニャがバルトロのアリアを歌っても会場は沸かず、ブラウンリーによる伯爵のアリアも盛り上がりません。

お客が喜んだのはアライモが歌うマニーフィコのアリアから。フローレスもラミーロのアリアで喝采を浴びました。《アルジェのイタリア女》第 1 幕フィナーレはペルトゥージの大声がやけに目立ち、それはそれで面白かったのですが、拍手は短く、すぐ休憩となりました。

第二部はロマノフスキーが歌う予定のピッロのアリアが無く、ミードによるエルミオーネのグラン・シェーナから始まりました。その歌唱はベルカント的ではありませんが、ヴェリズモ風に強い発声のロッシーニ歌唱も嫌いでない筆者は、周囲の不満顔をよそに独り喜んでました…これにはジェシー・ノーマンとマツコ・デラックスを足しで二で割ったような姿を見た喜びも含まれます（笑）。

アルノールとテルの二重唱はペルトゥージがややふざけた感じで逆効果。観客はフローレスが歌うアルノールのエールで欲求不満を解消しましたが、第 4 幕フィナーレはさほど喝采されません。口には出さなくても、ROF 通いの常連はみな「ナメんなよ～」と思っていたに違いありません。これは明らかにパラシオの誤算です。

かくして ROF のオペラとガラ・コンサートの感想を終わります。最後に、オペラの合間に観たコンサートと二つの催しについて簡単に記しておきましょう。

◎「オペラ・コンサート（Concerti Lirico-Sinfonici）」
（ロッシーニ劇場。8 月 19 日）

今年の ROF には他にも誤算がありました。筆者が観られなかった 8 月 16 日の演奏会「音楽の夜会」はアカデミー出身の 4 人の歌手のうち、観客が一番聴きたかったシャビエル・アンドゥアガが出演せず、17 日のアンジェラ・ミード「ベルカント・コンサート」も不評だったからです。

8 月 19 日に筆者がロッシーニ劇場で観た午後 4 時開演の「オペラ・コンサート」も同様に、ヴァルドゥイ・アブラミヤンがキャンセルし、チェチーリア・モリナーリに代わりました。出演はカルロ・テナン（Carlo Tenan）指揮 G.ロッシーニ交響楽団。歌手はジェシカ・プラットとチェチーリア・モリナーリ。前夜観たばかりの《デメートリオとポリービオ》の主役 2 人とあって新味がなく、感想を控えます。

TEATRO ROSSINI
LUNEDÌ 19 AGOSTO 2019 - ORE 16.00

CONCERTO LIRICO-SINFONICO
Direttore CARLO TENAN
CECILIA MOLINARI
JESSICA PRATT
ORCHESTRA SINFONICA G. ROSSINI

Gioachino Rossini
L'Italiana in Algeri
Sinfonia

Tancredi
Recitativo «Oh patria!»
e Cavatina di Tancredi «Tu che accendi questo core»
Cecilia Molinari

Adelaide di Borgogna
Aria di Adelaide
«Cingi la benda candida»
Jessica Pratt

Zelmira
Duettino Zelmira-Emma
«Perché mi guardi, e piangi?»
Jessica Pratt, Cecilia Molinari

Il barbiere di Siviglia
Aria di Rosina «Contro un cor che accende amore»
Cecilia Molinari

Matilde di Shabran
Rondò di Matilde e Finale Secondo
«Ami alfin? e chi non ama?»
Jessica Pratt

Otello
Sinfonia

Tancredi
Recitativo «Oh qual sceglìesti»
e Duetto Amenaide-Tancredi «L'aura che intorno spiri»
Jessica Pratt, Cecilia Molinari

オペラ・コンサートの出演者と曲目（変更後）

◎「ロッシーニ国立博物館」

今年 6 月に誕生したロッシーニ国立博物館（Museo nazionale Rossini）は、2017 年 10 月 31 日にペーザロがユネスコから音楽の創造都市（Creative City）に認定されたことを受け、国家戦略計画の一環として歴史的建造物のモンターニ・アンタルディ宮殿（Palazzo Montani Antaldi）内に開設されました。モンターニ・アンタルディ宮殿はロッシーニ劇場の右横 2 本目の道を 2 分ほど進んだところにあります。玄関を入ると正面に中庭があり、左の階段を上がると右手に博物館のチケット売り場があります。展示はその反対側にかかったカーテンの奥から始まります。

元々あった小ぶりな部屋を順次進んで展示を見る仕組みで、最初の 10 部屋（sala 1～10）はロッシーニの生涯と作品をパネルと展示品で辿ります。そして音楽鑑賞室（sala 11）、ビデオ鑑賞室（sala 12）、バーチャル体験室（sala 12）と続き、そのまま常設でない臨時の展示コーナー（sala 12～14）を経て出口（売店）に戻って終わり。

展示品はロッシーニの書簡、自筆譜、筆写譜、印刷譜、肖像画、19 世紀の文献、歌手の衣装、ロッシーニがもらった勲章などが、生涯に沿ってケースに収められています。オペラの自筆譜は、《湖の女》《イングランド女王エリザベッタ》《アルミーダ》がそのまま置かれていました。臨時の展示コーナーは今回「音の壁（Wall of Sound）」と題し、現代の著名な写真家グイード・ハラリ（Guido Harari,1952 - ）が撮影したロックやポップスのスター写真が 53 枚パネルで展示され、うち一つはパヴァロッティでした。

筆者は大規模な博物館を想像していましたが、思いのほか小さく、説明文をじっくり読まなければ 1 時間ほどで見られます。ロッシーニの家の展示は従来どおりですから、ロッシーニ音楽院内のロッシーニ小御堂（Tempietto Rossiniano）の展示品、ロッシーニ財団の所蔵資料、個人コレクターからの寄贈や貸与を基に生涯に沿った品を選び、設立資金は部屋の改装、視聴覚室とバーチャル体験の機材、パネルとケースに充てられたようです。

概要はこちらからご覧ください→ https://www.museonazionalerossini.it/il-museo/

ロッシーニ国立博物館の玄関と展示室の一つ、2019 年のロッシーニ劇場（筆者撮影）

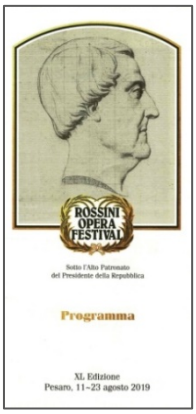
◎「ロッシーニの家の地下ワイン庫での試飲会」

4 月 16 日配信のメルマガ第 197 号に書きましたように、ロッシーニの家に地下ワイン庫が設営され、事前予約制の有料の催しが始まりました。これは 8～15 名のグループで 30 分、10～25 名のグループで 1 時間のイヴェントで、郵船トラベル・ツアー20 人で申し込みました。時間は 8 月 19 日 11 時 30 分、場所はロッシーニの家の 3 階ではなく地下ワイン庫でした。

ワイン試飲会のつもりでしたが、何種類ものハムとサラミ、2 種のチーズのほか、夏トリュフの瓶詰ソースをつけて食する焼き生地など、さまざまな食材が並んでいます。すべて地元産でそれぞれの説明を受け、ロッシーニの肖像がラベルにデザインされた白ワインを飲みました（ちゃっかり赤ワインもおねだりしてしまいました）。

どれも大変美味しく、昼食前の腹ごなしには量が多かったかも。価格も一人 10 ユーロだからお得です。ロッシーニの家の斜め前のショップと提携しており、飲んだワインや夏トリュフの瓶詰ソースはそこで買える仕組みです。8 人以上のグループによる事前予約制なので、日本人は私たちだけが恩恵に与れたかも…食べて飲むことに忙しく、写真を撮り忘れてしまいました。あしからず。

以上が筆者による今年のザルツブルク音楽祭＆ロッシーニ音楽祭のレポートでした。連日忙しく、記憶に不確かなところがあったらお許しください。



2019 年のザルツブルク音楽祭とロッシーニ音楽祭プログラム